

# 茶の湯 文化学会 会報

第110号 / 2021年9月29日  
発行 茶の湯文化学会  
京都市左京区下鴨森本町15  
生産開発科学研究所内  
〒606-0805  
TEL 075-702-9270  
FAX 075-702-9314  
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp  
<https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/>

## 「淀屋船」と沼田藩土岐家の茶道具

依田 徹

遠山記念館では、「釣舟花生  
銘 淀屋船」(図1、以下「淀屋船」  
と省略)を所蔵している。銅と錫  
の合金である砂張を用いた鍛造の  
器で、中でもこの種の舟型の器は、  
本来東南アジア地域の食器であつ  
たと考えられている。十六世紀頃、

こうした砂張製品が交易船によつ  
て日本へと持ち込まれると、茶人  
は鎖と花配りを付け、床脇に吊つ  
て用いる釣花入として用いるよう  
になった。特に「松本舟」(泉屋  
博古館蔵)、「針屋舟」(畠山記念  
館蔵)、「淡路屋舟」(野村美術館



図1 「釣舟花生 銘 淀屋船」

蔵)を合せて「天下三舟」と呼び、  
また「茜屋舟」「艀舟」を加えて  
「天下五舟」とも数えたとされる。  
ただし天正年間にわび茶が流行す  
ると人気は下がり、『山上宗二記』  
には「釣舟の数多し。ただし当世  
はいかがか。主遠き物なり」と、  
時流にそぐわないものになってい  
た状況が記録される。しかし近世・  
近代を通じて名物は諸方に所蔵さ  
れており、この「淀屋船」もその  
一つとなる。

「淀屋船」の造型を見ると、胴  
幅を広くとった姿形は堂々として  
おり、黒味を帯びた深みのある地  
金の色も美しい。先述の五舟の選  
からは漏れているものの、それら  
に劣らない優れた作行と言って良  
いだろう。そしてその名称には、  
江戸時代に大坂の豪商として名高

かった淀屋の名を冠している。今も大阪市の「淀屋橋」に名を遺す豪商淀屋は、初代淀屋常安が豊臣秀吉に重用され、二代淀屋言當が米市を創設することで、近世大坂経済の繁栄を方向付けたとされる。淀屋の隆盛は井原西鶴『日本

永代蔵』にも謳われており、『元正間記』には邸宅の天井をガラス張りとして金魚を泳がせたという逸話が残る。そしてついに五代目の淀屋辰五郎の代に行き過ぎた奢侈を咎められ、淀屋は關所処分となった。この時に没収された財産については、諸方に記録が残り、黄金だけで十二万両あったなどと伝えられる。ただし、淀屋が關所となったこともあり、確実な歴史史料は少なく、後世ついた潤色も多い。残念ながら現在の「淀屋船」の付属品を見ても、淀屋旧蔵を裏付ける資料は付いていない。淀屋には複数の分家もあるため、その一族のいずれかが所持していたものと、漠然と考えられてきた。実

質的に、「淀屋船」の来歴について確実なのは、明治期に旧小浜藩主の酒井家が所蔵したことだけであった。しかし先だつて、『大正名器鑑』の「坂部井戸」の項目に、次の証書の写しが掲載されているのを発見した。

今般淀屋と二品、金千五百兩に而當家に右商人より引受預り申事前條之茶碗之義故、後年土岐家にて受出度被申候事有之候はゞ、何時にても千五百兩金さえ被差越候はゞ返却遣す積の心得にて可居事ここから「淀屋船」が、小浜酒井家の前に土岐家の所蔵であったことが判明した。

周知のとおり、土岐家は美濃源氏の名門である。その起りは平安時代中期に源頼光が美濃守となったことにはじまり、頼光の孫である源国房は美濃土岐郡（岐阜県土岐市周辺）に地盤を築いていく。室町時代になると、土岐家は美濃国の守護大名となって全盛期

を迎えるが、戦国時代に家中の混乱により弱体化し、齋藤道三が土岐頼芸を追放する事で失墜する。その後、土岐家の庶流であった明智定政が徳川家康の家臣となり、小田原征伐などの軍功によって土岐家の再興が許された。定政から四代後の土岐頼楨は幕府老中となり、寛保二年（一七四二）に上野国沼田藩（群馬県沼田市）へ三万五千石で移封され、幕末まで土岐家が同地を領することとなった。そしてここで重要なのは、土岐家が次の年次で大坂城代を務めているという点である。

土岐頼楨（一六九一～一七二二年）  
土岐頼楨よしか（一七三〇～一七三四年）

先述の淀屋辰五郎の關所処分が、実に宝永二年（一七〇五）のことであった。すなわち対応したのが頼楨となるはずで、この時に頼楨が「淀屋船」を入手した可能性が浮かび上がってきたのである。

また同じく土岐家旧蔵であった「坂部井戸」（図2）についても、豊臣秀吉が坂部某に下賜したという伝承を持つ、重要な作品である。『大正名器鑑』によれば、十八世紀初頭には三井家の蔵となっており、それを土岐頼楨が大坂城代の時に八百五十両で買い求めたとする。現在所在はわかっていないものの、『大正名器鑑』には次のような箱書付が記録されている。

高圓井戸當家之重器  
永々可爲秘藏者也

丁酉

二月十八日 頼楨（花押）を指している。頼楨は三井家から「坂部井戸」を買い取った後、しばらくしてから自ら箱を新調し、新たに「高圓井戸」と追銘を付けて書付を行ったのである。頼楨は「坂部井戸」「淀屋舟」と、かなり高額的茶道具を短期間で求めているので、この時期に茶の湯に力を入れなければならぬ状況にあっ



図2 「坂部井戸」(『大正名器鑑』より転載)

ていたのかも不明である。

たのだろう。残念ながら、この時期の土岐家の茶に関する史料は見つからない。頼殷の次代である土岐頼稔に関する記録として、「御日記御廻状書抜」(『上山市史編集資料34』上山市、一九八二)が遺されているものの、茶道具に関する事項は見当たらない。蔵帳の類も確認されておらず、この他に土岐家がどのような茶道具を所蔵し

最後の沼田藩主であった土岐頼知は、廃藩置県が行われた明治四年(一八七二)に知藩事の任を

解かれた。先に挙げた証書の日付も明治四年なので、この前後に頼知が

「淀屋舟」と「坂部井戸」を質入れし、それを小浜藩知藩事であった酒井正義が買い求めたことにな

る。大正十二年(一九二二)六月に行われた小浜藩酒井家の売立は、「国司茄子」(藤田美術館蔵)、「北野肩衝」(三井記念美術館蔵)と大名物の茶人が動き、また「吉備大臣入唐絵巻」がポストン美術館に海外流出した

ことでもよく知られている。この売立で「淀屋舟」は二万五一七八円という金額で落札され、榮太樓店主で宗徧流時習軒家元でもあった細田安兵衛の所蔵となる。さら

に昭和十六年(一九四一)八月に遠山元一へと譲渡され、昭和四十五年に遠山記念館の所蔵へと移管されたのである。

## 理事会

令和三年度第一回理事会が七月四日(日)午後一時よりZoomにて行われた。理事十四名が出席し、以下の議題について討議がなされた。

- 一、令和三年度総会について
    - ・ 総会次第
    - ・ 書面会議について
  - 二、令和三年度大会について
  - 三、会誌・会報について
  - 四、チラシについて
  - 五、その他
- 第一議題では、令和三年度総会提出資料について、令和三年度総会次第に沿って、第一議案 令和二年度事業報告の件(資料①参照)、第二議案 令和二年度決

算の件(資料②参照)、第三議案 令和三年度事業計画の件(資料③参照)、第四議案 令和三年度予算の件(資料④参照)、第五議案 役員選出の件(資料⑤参照)、報告と説明がなされ承認された。

さらに第五議案においては、理事に福島修氏(東京国立博物館学芸員)、幹事に下村奈穂子氏(根津美術館学芸員)が推薦され、承認された。

令和三年度総会は書面会議とし、会員全員に郵送し、返信ハガキにてお答えをいただくこととなった。(議案の資料①～⑤は令和三年七月十六日付にて郵送)

第二議題では、令和三年度大会について、六月六日(日)に予定していた大会が新型コロナ感染防止のため延期となったことを受け、会員の多くの参加機会と安全を得るべく、Zoom開催とする

ことが提案され、承認された。九月二十五日(土) 東洋英和女学院大学横浜キャンパスをお借り

して、発表者・スタッフ・視聴希望者合わせて五十人以下の参加者によるZoom配信を行う。しかし、新型コロナウイルス感染増加に伴う緊急事態宣言の発令などの場合によつては、完全Zoom配信とすることも考えておく。

第三議題では、会誌・会報について、今年度は、会誌三十六号・三十七号、会報一〇九号〜一一二号が発行予定であることが報告された。

第四議題では、チラシについて、会員増加対策の一つとして、チラシを作成し、Web上で拡散および博物館等での配布をお願いする。依田理事に作成していただいたチラシをたたき台に議論がなされ、改善点を踏まえ、修正したチラシを次回理事会にて提案していただくこととなった。

第五議題では、会報や封筒に掲載している茶の湯文化学会のロゴを、ホームページにも反映することとなった。

## 例会

### 東京例会

(令和二年十月二十四日)

「竹川竹斎『川船の記』(全八冊、射和文庫蔵) について」  
岩田澄子

玄々斎(裏千家家元十一世)との親交で知られる伊勢の豪商が記した茶書『川船の記』。この中の一冊『巻五』(分類番号815)は、全一三三頁(墨付五九丁)のうち、大半(一四〜一三三頁)が安政七年(一八六〇)に起きた桜田事変に関する記録であることが判明した。

改めて『川船の記』(全八冊)を確認すると、各冊の構成に一貫性がなく、二冊は同内容である。問題の一冊『巻五』は、表紙に『川船の記』が茶書の名であることを示す歌とともに、「茶通・唐物・天目・盆点、秘書」と記され、八冊の中で最も目立つものとなった

いる。竹斎はこれを秘伝の点前書と信じこませ、堂々と記録を隠していたのである。

本発表に際し、『巻五』の冒頭にある唐物点前の記録を、竹斎の『な、そひの日記』(茶道文化研究第五輯、二〇一三年、今日庵文庫)と照合した結果、特別な意味があることが判明した。嘉永元年(一八四八)五月二十五日は竹斎の四十歳の誕生日で、午前中は玄々斎から唐物点前の伝授を受け、午後は茶室・今日庵で、竹斎が亭主・玄々斎が客となった茶事が行なわれた日だったのである。

竹斎が点前書の中に桜田事変の記録を隠したのは、子孫の身の安全のためと思われる。井伊直弼は公式には事件後も生きていることにされ、記録は持っているだけで危険なものだった。さらに竹斎は開国論者の先頭に立ち、名指して命を狙われていたのである。

『巻五』には、事件を題材にした空想上の茶会記も含まれる。釜

は「足屋切合」、水指は「政事、刃傷手」、茶は「後むつかし」など、懐石料理も含め全体が言葉遊びになつていいる。事件と茶の湯の知識が必要であるため、茶会記は竹斎の自作であろう。茶会記は同内容のものが二ヶ所に記され、ざっと見た時に『巻五』を茶書だと信じ込ませる一定の効果があつたものと思われる。

(令和三年二月二十七日)

『宗湛日記』・『天王寺屋会記』に見える天目台の使用」  
作山裕美香

一般に天目茶碗は天目台に乗せて使用するとされている。

しかし、天正年間の茶会記である『宗湛日記』・『天王寺屋会記』(目会記)をみると、相対的に例は少ないが、天目茶碗が単体で、天目台を使用せずに用いられている様子がうかがえる。たとえば、天正十五年一月三日の大阪城の茶会では、中臺子に松本茄子が内赤ノ

盆に乗せられている傍らで、尼子天目が「臺なし」の状態で使用されている。

天目茶碗と天目台は必ずしも対で用いられるわけではないのでないか、という疑問を出発点として、『宗湛日記』・『天王寺屋会記（自会記）』の天目の記載のある会を見直し、以下の六つの項目に分けて現代には見られない用い方をまとめた。

- ①天目台無しで使用される天目茶碗
- ②天目台に乗る茶碗は天目茶碗とは限らない
- ③天目茶碗の重ね茶碗
- ④天目茶碗・天目台の使用後の所作・作法
- ⑤天目台で茶を呈される客には「もてなしの差」がある
- ⑥天目茶碗は濃茶用の茶碗なのか全体を見渡してみると、「天目台と天目茶碗」「天目台と天目以外の茶碗」「天目茶碗のみ」といった組み合わせを変えることによつ

て、その日の会の趣向や微妙なもてなしの違いを演出していた様子が見え、画一的に天目茶碗と天目台が対のものとして用いられていないわけではないことが分かった。

（令和三年二月二十七日）

『南方録』における師資相承の系譜——道元論著と叡山語録の影響——  
櫻本香織

立花実山撰『南方録』における師資相承の系譜の特徴は、利休と紹鷗の師弟関係が強調されていることである。本発表では、以下の五点を明らかにした。

- ①実山と叡山道白の師弟関係について、『鷹峯叡山和尚広録』では、「竹篋」を介した心の交流と嗣法の話があった。
- ②『南方録』の「覚書三三三」と「滅後」二六では、紹鷗と利休だけでなく、宗啓も加えた三人の師資相承の系譜が見られた。
- ③実山の他の著作においても、

紹鷗・利休・宗啓の三人の師弟関係の系譜が重視されていた。『岐路弁疑』では、紹鷗と利休が「鷗・休」と対で表現され、同書「牒」には、利休を「元祖」とし、かつ利休の系譜を「正法」と定義している。これらの表現や言葉が、叡山語録『宗統復古志』にも使われており、実山はこの筆録を参照していた可能性が高いと考えられる。

④『宗統復古志』にある「如来世尊正法」や「吾ガ永平元祖」という文言は、実山の著作に見られる「正法」や「元祖」と近似している。また、『宗統復古志』では、「大陽・投子」「天童・永平」という禅宗における師弟の關係が対で表現されており、『岐路弁疑』に見える「鷗・休」という対の表現に影響を与えた可能性がある。

⑤『正法眼蔵』「嗣書」にある「初祖摩訶迦葉悟於釈迦牟尼仏」「釈迦牟尼仏悟迦葉仏」という三人の師弟關係の系譜が、『南

方録』における紹鷗・利休・宗啓の三人の師資相承の系譜に対応している指摘した。一方、『正法眼蔵』「面授」には、「阿難尊者この面授を住持して、商那和修を接して面授す」などとあり、阿難尊者と商那和修に見られる師弟の關係性が、紹鷗と利休の師弟關係が強調されることに影響していると明らかにした。

（令和三年六月二十七日）

「益田克徳の茶とその周辺  
その一——洪沢菜一の旧飛鳥山邸茶室について——」  
神保乃倫子・八木京子

明治初期の茶の湯ブームを作り、多くの財界人達を茶に引き入れた益田克徳の資料は『益田克徳翁伝』と高橋箒庵の「回想」にしかない。今回、克徳の茶の姿を明らかにする為に洪沢菜一の旧飛鳥山邸茶室を取り上げて、克徳が関わった状況証拠と茶室の写真と

平面図を集めた。客観的な資料は清水組編『暖依村莊写真帳』に「委員 益田克徳君」とあるのと、洪沢の長女歌子が日記に「益田氏」と書き克徳と読み取れる二カ所である。洪沢の発言として「今の飛鳥山の庭を造った時、益田克徳や柏木貨一郎の二人が庭をお造りになつたら是非茶室をお建てなさい、と薦めて茶室を造った。」との記述を参考にすれば、克徳が茶室と茶庭を計画して柏木が設計施工した、と考えられる。そして明治三十二年六月二十七日に徳川慶喜と井上馨を招いて新築茶室で茶事を催している。それは単に洪沢の趣味や社交の為の茶室ではなく当時、洪沢が慶喜の名誉回復を願って、頑なに恭順を貫いていた慶喜自身の気持ち好転させる為に、克徳が秘密裏に計画した「將軍様を招く」即ち「御成り」の為の新築茶室であった、と結論付ける。その為と考えられる多々の工夫も発見できた。洪沢も後年、「あ

の茶席は、あれで仲々値打ちがある。徳川家を公爵にしたのも、謂わばあの茶室だからネ。」と茶室について唯一その価値を語っている。現在この「御成りの茶室」の貴重な遺構が幸いにも現地に残っているにもかかわらず、徐々に土に埋まりかけているのは誠に残念なことである。

(令和三年六月二十七日)

『北条五代記』に見る『山上宗二記』の情報について  
梯弘人

軍記物語である『北条五代記』において、茶書として知られる『山上宗二記』に取材した逸話が「松尾の茶入付山上宗二事」として所収されている。そこで本報告では、『北条五代記』に収録される逸話をもって『山上宗二記』中の記事情報の伝播、近世初頭における『山上宗二記』の評価について検討を行った。

『北条五代記』の逸話の記述と

『山上宗二記』に記述を比較したところ、『北条五代記』は『山上宗二記』のいくつかの部分を抽出して編集しているということが判明した。また『山上宗二記』の内容を取り違えて記している箇所や事実誤認と思われる箇所も存在した。このような記述の状況から、この『北条五代記』の逸話が高価

な茶道具を追い求める人々への批判として記されたものである可能性を指摘した。

次に、『山上宗二記』の写本の系統のうち、『北条五代記』がどの系統につながるかを確認した。『北条五代記』において使用される「目明(めきき)」の用例に着目し比較検討を行った。その結果、北条氏の家臣である板部岡江雪斎宛の写本の系統のみ「目明」と記されており、他の系統の写本には「目聞」と記されている。そのため、『北条五代記』作者の三浦浄心は、板部岡江雪斎に宛てられた『山上宗二記』、もしくはその系統の写

本を見たと考えられることを明らかにした。

### 東海例会

(令和三年六月十九日)

「昭和美術館のコレクション」と後藤幸三  
後藤さち子

昭和五十三年に名古屋に開館した昭和美術館は、設立者である後藤幸三(一八八一～一九七七年)が妻と父の三人で収集した、日本の書画作品と茶道具を中心としたコレクションを収蔵し公開している。

今回は、主に大正後期から昭和十年代に行われたコレクション収集の背景や特徴を幸三の大正期の日記や幸三夫妻が住まいとした「南山寿荘」での茶会記などを使って紹介した。

コレクション収集には、売立が盛んに開かれた時代であったこと、名古屋のみならず、東京・大阪・京都・金沢といった都市での売立

に積極的に足を運んだこと、信頼

する道具商との繋がりとといった要

因が寄与している。幸三は生涯趣

味とした和歌に関し質の高いコレ

クションを収集し、夫妻共通の趣

味として楽しんだ茶の湯に使う道

具の収集については、結婚前から

茶の湯に親しんでいた妻が大きく

関わっていた。書画については幸

三の父安太郎の趣味を反映してい

る。

茶会記からは、幸三が昭和十年

代から妻が没するまでの二十年間

に親族や幸三の仕事関係者のほ

か、名古屋の実業界の数寄者、茶

道家元をも招いた茶会を催してい

たことが判明した。これら殆ど

の茶会では、妻が点前をして夫婦

揃って来客をもてなしているのが

大きな特色である。

また、何点かの茶道具や「南山

寿荘」をつながりのある実業家か

ら直接譲り受けたりするなど、実

業界の付き合いが趣味の茶の湯コ

子もうかがうことができた。

## 金沢例会

(令和三年五月二日)

### 「存在しない名物漆器」

#### 福島 修

伝世した貴重な名物道具の数々

は、素材や技法、文様の細部に

たるまで豊富な情報を提供する。

これらのモノがあるからこそ、わ

れわれは在りし日の茶の湯を具体

的に思い描くことができる。一方

で多数の名物は伝世の過程で消失

しており、これらを考えあわせな

ければ一時期の名物観を十全に把

握したとは言いにくい。それらは

存在しないからこそ誤解も生じや

すく、わずかな誤解が史料の情報

を歪ませる危険もはらんでいる。

本発表では、とくに茶会記や名

物記に登場する漆器の例をいくつ

か取り上げ、主に三つの視座から

「存在しない名物漆器」について

考察した。一つは「模古作」であ

過去の名品の技法・様式を模し

た作品のことで、その制作背景に

よって質の良否はあるものの、忠

実な模古作はオリジナルの姿を知

るための貴重な情報源となる。二

つ目は、名物として知られた作品

名が、後世に別のものと誤解され

た「意味の変化」の事例を紹介し

た。たとえば外側面が彫漆で内面

を無文に改造した唐物盆「内赤盆」

は、『茶道筌蹄』などにおいて内

朱外青漆の「若狭盆」と混同され

ている。三つ目は根本的にこれま

で見してきた例とは異なり、たとえ

ば『南方録』に登場する名物など、

記録が複数の信頼できる史料に見

られず、実在自体に疑問が残る作

品について考察した。それが「空

想の名物」ならば、もちろん史実

上の名物観を示す一要素として捉

えることはできないが、ある時期

における名物観から生まれた表象

として興味深い材料を含むものと

考えることができる。

## 例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する

場合がありますので、ホーム

ページまたは事務局までお問い

合わせください。

### 東京例会

令和三年十月二十三日(土)

午後二時

会場：未定

「益田克徳の茶とその周辺―その

二」

神保乃倫子・八木京子

「樂長入の創意について」

今井敦

令和三年十二月四日(土)

午後二時

会場：未定

「備前焼の皿・鉢」

下村奈穂子

「十八世紀茶の湯からみた武家の

人的交流」

谷村玲子

令和四年三月十三日(日)  
午後二時

(Zoom開催)

「押入・押入床について(仮)」

山岸多加乃

「渡辺又日庵とその周辺の茶の湯」

水野荘平

東海例会

令和三年十一月六日(土)

午後二時～三時半(開場午後一時半)

会場

昭和美術館会議室

「釜の話」

加藤忠三郎

北陸例会

令和四年三月十二日(土)

「未定」

高知例会

令和三年十二月十二日(日)

午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室

岡倉天心『茶の本』第七章輪読

茶事 正午～午後四時

席主 四名

会費 五千円(参会希望者は予め連絡をしてください)

令和四年二月六日(日)

午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室

高知支部二〇二二年度事業計画

新刊案内

『茶の湯のトリビア』

中村幸著 淡交社

定価一、三二〇円

『茶会記を読み解く 茶人の工夫と茶会の変遷』

神津朝夫著 淡交社

定価一、八七〇円

『石州流生花三百ヶ條』

石州流茶道茶書研究会編

マインド 定価四、四〇〇円

『元伯宗旦 侘び茶の復興』

生形貴重著 河原書店

定価一、九八〇円

『目利き—谷松屋八代戸田露吟覚書—』

木津宗詮著 河原書店

定価三、三〇〇円

徳留大輔責任編集『唐物茶碗』(『茶の湯の茶碗』第一巻)

淡交社 定価六、九三〇円

定価一、八七〇円

『石州流生花三百ヶ條』

石州流茶道茶書研究会編

マインド 定価四、四〇〇円

『元伯宗旦 侘び茶の復興』

生形貴重著 河原書店

定価一、九八〇円

『目利き—谷松屋八代戸田露吟覚書—』

木津宗詮著 河原書店

定価三、三〇〇円

徳留大輔責任編集『唐物茶碗』(『茶の湯の茶碗』第一巻)

淡交社 定価六、九三〇円

お詫びと訂正

総会(書面会議)資料に誤りがありました。深くお詫び申し上げます。本会報にて訂正、掲載いたします。

しましたのでご確認ください。ようお願い申し上げます。

\*第四号議案 令和三年予算案の件

収入の部の前期繰越金の金額に誤記があり、収入の部の前期繰越金と合計、支出の部の次期繰越と合計を訂正しました。『茶の湯文化学』第三十六号に掲載。

\*第五号議案 役員選出の件

幹事退任は、松本康隆氏一名のみでした。

\*年会費未納の方は、至急払込みください。よろしくお願いいたします。

願います。

